

## 高松次郎の《山手線事件》—— 「空虚」の可視化を求めて

同志社大学 大森 和紗

本発表は、日本の戦後美術史において《山手線事件》と称されている一連の行為を、高松次郎(1936-1998)の観点から読み解くものである。

1962年10月18日、高松、中西夏之(1935-2016)ら4人は、品川駅から山手線の電車に乗り、自身の作品を乗客に見せながら移動した。高松は《紐》、中西は《コンパクト・オブジェ》を持ち込んだ。山手線を一周する予定は変更され、上野駅から外に出て上野公園で終了した。このことを報告する座談会をきっかけに、高松と中西は赤瀬川原平(1937-2014)と「ハイレッド・センター」を結成することになる。

山手線を舞台に繰り広げられた一連の行為は、今日《山手線事件》と呼ばれている。光田由里は、高松について論じた著作において、本行為を「集団による、匿名性を狙った行為」と記している。河合大介は、《山手線事件》における「匿名性」が赤瀬川にどのように影響したのかについて論じている。このように先行研究では、1960年代の「反芸術」的な「ハプニング」「イベント」として、その「集団性」や「匿名性」に特徴があるものとして語られてきたのである。

しかし、ここに作家の個別性を見いだすことができないものであろうか。発表者は、一連の行為に当事者や関係者がつけた呼称に注目したい。中西は、1966年9月に赤瀬川の「千円札裁判」の弁護側証人として出廷した折に、一連の行為を「山手線のフェスティバル」と呼んでいる。それに対し、高松は、これらの行為を実行直後から「事件」として語り続けている。これを受けて、赤瀬川は著書で「通称《山手線事件》」と記し、今日この呼び名が定着しているのである。

では、なぜ高松は一連の行為を「事件」と呼んだのだろうか。本発表では、《山手線事件》を高松の観点から再構成することを試みる。決行の意図や行為の詳細を同時代の言説や写真に基づいて検討することにより、作家が「集団性」や「匿名性」を求めた理由を見出し、その意義づけを行いたい。

そのために、まず、高松の一連の行為に関する語りをまとめる。これにより、高松が「事件」という時、事を起こした人物やその動機が特定できない出来事、すなわち「未解決事件」を指していることを確認する。次に、通称《山手線事件》に至る経緯を確認し、実行時の考えを検討する。そして、高松にとって「未解決事件」とは、退屈な現実を反転させる可能性である「空虚」であることを示す。最後に、通称《山手線事件》を撮影した写真を分析する。そして、高松は《紐》を直線状に引き延ばすことによって、一時的に場を占拠し、プラットホームや公園といった本来は人が往来する空間に、人がいない空間を生じさせたこと、即ち「空虚」を可視化したことを明らかにする。

以上により、高松にとって山手線で行った一連の行為は「空虚」を生み出す試みであり、そしてそれを「事件」と呼ぶことで、その未解決性を強調するものであったと結論付ける。